

コメント E：石井恵理子（日本語教育の立場からのまとめと問題点の指摘）

教科教育と国語教育・日本語教育の教師の交流を

石井 もう今まで、問題点の指摘については具体的な解決もいくつか含めてかなり出尽くしているかと思います。まとめというのは、大変私にとって重過ぎる荷でございまして、一度お出したレジュメの中に大きく非常に大まかな3つの点を出しましたけれども、それに今日全体の話をつながいながら考えたことを含めて、感想的にお話させていただきます。

まず、1点目に挙げました「教科教育と日本語教育、日本語指導の連携」ということに関しては、午前、午後を通じていろいろな方々から具体的な実践の試みも含めて、御報告があったこととございます。そういった実際の動きがかなり出てきているということ自体が非常に心強いことかと思いますが、ただ、今日いろいろ御報告があったものは、正規の教員でいらっしゃる先生方が学校の中でなさっている試みのものであったり、あるいは足立さんのように学校外で行っているものです。おそらく日本全国の受け入れ状況を考えますと、学校の中に日本語教育的な指導の視点なり、知識を持っていらっしゃる先生というのはそれほどまだ多くいらっしゃらない。そうすると、かなりの学校では、取り出しの時間だけ日本語教育経験者などを外から呼んできてその時間だけもってもらうとか、ボランティアがそこに入るなどという形で手当てをしているということがあると思うのですが、学校外の方がその部分に関わっているときに、教科教育の先生方、あるいは国語の先生方と日本語教師という立場で入ってきた先生たちとの交流というのは、極めて乏しい状況であるかと思えます。日本語教師というような立場で入ってきた先生方も、日本語が話せるように指導するという視点では非常に経験は豊富ですけれども、ただやはり学校教育の中でことばが話せるだけではなくて、そこで教科の学習が同時に成り立つという視点が欠落しているということに関して、自覚が足りない部分がありますし、学校の先生からは、丁度授業ではここをやっていますからこれに関して手当てしてください、と教科書を見せられるといった程度の本当に細かいやり取りだけで分業されているような実態が多いように思えます。その辺りも含めて、教科学習と日本語というのを学校の中の体制で考える、それは非常に重要なこととございますけれども、それに加えてもう少し学校の外といたしますか、第二言語教育というような視点で見ている者との交流というものがもう少し深くなることでいろいろなことがわかってくるのではないのでしょうか。例えば、母語と日本語の両面から子どもの能力を見ていこうということは非常に大事だと思いますけれども、そういった視点というのもおそらく、日本語教育、第二言語教育という観点の方から何か出せるものがあるように思えます。

教科教育と日本語教育、あるいは学校の中で行われている教育と第二言語としての日本語教育の接点をいろいろ考えていく上で、今日御発表をいただいたような、例えば棚橋さんですとか寺井さんなどのような各教科の中の日本語の使用がどうなっているのかとか、そこで国語的なことばの指導がどうなっているか、ということに関しての御研究がいくつもあるということは非常に素晴らしいことだと思う一方、それに対して、日本語教育の側に

第二言語教育として子どもの問題についてじっくりお示しできるような基礎資料がまだまだ不足しているというようなことを強く感じまして、その辺りがおそらく日本語教育側の、まずやらなければいけないことだろうと思います。

例えば、寺井さんの資料などもこれを日本語のまだ十分ではない子どもといますが、ネイティブではない子どもがいるときという視点で見えていきますと、先生の発話で「はい、それでは話を聞いて。ノートに、先生今から書くからいっしょについて来てください。いくよ。」というような一文が冒頭に出てきます。これはネイティブにとって何の不思議もない発話ですが、おそらく日本語教育で教えている語彙、あるいは文型、表現、意味で考えると、「先生今から書くからいっしょについて来てください」というと、「ついて来て」というのはどこに行くのだろうと考え、「いくよ。」と言われたら子どもは思わず立ち上がってしまうのではないかと思うのです。つまり日本語教育の中で基本的に教えていることと、学校というような特殊な場で多用されるいろいろな表現が違うということに関して、日本語教育は今まで大人の日常場面でのコミュニケーションのことを一生懸命見てきたというようなこともありまして、その辺がやはり手薄というような印象を持ちました。そのことを我々自身やらねばならないと思っています。

教師と親と地域の連携

それから、2点目の教師とか親、地域の連携についても、多くの先生方がもうすでに御指摘くださったことです。特に、日本語学習の必要な子どもたちの場合、親も日本語ができないというような状況が多いですから、おそらくいろいろな形でボランティアの方ですとか、学校外の方が関わるということが現実に行っているかと思うのですが、やはり先ほどの教科教育のことで少し申しましたけれども、学校の中だけで対応する状況というのは限界があるかと思っています。子どもの学習環境をどう整えるかということについて親は非常に大きな決定を行っています。家庭でどういうことが子どもに提供できているか、あるいは親はどういう意思で子どもを育てようとしているか、そういったことも含めて教師が学校という側面以外の子どもの面について親と十分に話し合う、あるいは、家庭を支えている地域とのあいだにパイプができることで、おそらく学校がすべてを背負ってしまわなくて済むのではないのでしょうか。そういった意味で、教師と親と地域という形での連携が必要であろうと考えます。

日本語ネイティブからの歩み寄り

それと、もう1点最後に挙げました点ですけれども、これは日本語教育に関わっていて常に思うことなのですが、外国人に対する日本語教育というと、一生懸命外国人に何かを教えるということで我々努力をしますが、当然外国人が日本語を使おう、あるいは学ぼうというときに、外国人だけで日本語を使っているわけではないわけで、必ずその先に相手となる日本人が存在する。そうすると、外国人に対する日本語教育の問題は同時に日本人自身にとっても、ノンネイティブの人たちとのコミュニケーションの問題として、考えるべき問題だというふうに捉えることができるはずです。学校の中でもその子どもが日本語

を自分自身で学ぶ部分は当然ありますけれども、授業のほとんどは集団で行われているわけで、そういう授業の中に子どもが参加していくということを考えたときに、当然子ども同士の間で一体どういう学び合いができるか、あるいは教師がそういった日本語力に関してはばらつきのある子どもたちが混在した集団の中で、どういった学びの場を作ろうかという視点を持つことが必要だと思います。日本人の子ども側にあるスタンダードを設けておいて、足りない子はここまで来なさい、と日本語力の足りない子だけに努力を求めるという方法ではなく、もちろん長い目ではできるだけここに近づこうという目標立てがあると思いますが、個々の授業の中では当然、ネイティブである日本人側がその子どもの理解のためにどういう歩み寄りができるか、どういう努力ができるか、ということの積み重ねが不可欠だろうと思います。そのことは取りも直さず、ネイティブが日本文化を基調にして不用意に話したことが相手にわからないときに、例えば言い換えるとしたらどんな言い換えが有効なのか、あるいはどんなふうな枠組みで話すとスムーズに事柄の核心がちゃんと相手に伝わるのか、というようなことについて、教師自身もそうですし、日本人の子どもたちがコミュニケーションについての本質的なことを学ぶ非常に有効な機会になると思います。その点で、外国人に対する日本語教育の問題を外国人の子どもをどうするかという視点だけではなくて、日本人の子どもたちに対する日本語の運用の能力を高める教育、あるいはもう少し広くいえば、異文化コミュニケーションの教育ということにもなるかと思いますが、そういう視点で広げていくということが、今日の一つの大きなテーマであります国語教育と日本語教育の統合という観点からも有効なのではないか、と考えました。以上でございます。

多分野の専門家が会する場の設定

西原 私もこのメンバーであるにもかかわらず、なかなかレギュラーな形で研究会に参加させていただけないのですけれども、設定としてこの研修会が非常に有益な場だということを強調したいと思います。現場にいらっしゃって国語教育や日本語教育に関わっていらっしゃる先生方、学校管理の立場にある教頭先生等の方々、教科を含めて大学等で研究者としてご活躍の方々、それと、行政の方々が同じ問題について一堂に会して、話し合う場があるということはなかなか得難いことで、この種の話合いが今回のプロジェクト以降も継続されていくということが、これからの地球市民を育てる教育のためには必要だと思います。多くの人に関わり、そして関わり続けるということが必要であろうと今日もまた思いを新たにいたしました。